

多賀 史郎

ヴィオラのケースをカーボン製のものに替えてから、楽器ケースとしては珍しいためか、予期せぬ人から声を掛けられるようになった。先日も、自宅マンションのエレベーターで、「失礼ですが、背中に背負っている箱には何が入っているのですか？」と見知らぬ老女から声を掛けられた。恐らく銃か何か入っているとでも思ったのだろう。「ヴィオラという楽器です。」と答えると、「ああ、ヴィオラですか。」と理解したようだった。以前は、「ヴィオラって何ですか？」とか「チェロより大きい楽器ですよ？」とよく言われたものだ。近年は「皇太子様がお弾きになる楽器です。」というように理解してもらえるようになった。

ヴィオラはそれほどマイナーな楽器だが、実は、語源的に言うと、ヴァイオリンやチェロの基になっている。ヴァイオリンを意味するイタリア語“violino”の“ino”には「小さい」という意味がある。つまり viol=ヴィオラ（正確には祖先）の小さいのがヴィオリーノなのだ。また、チェロを表す“violoncello”の“on”=“one”には「大きい」という意味がある。つまりヴィオラの大きいのがヴィオロン（チェロ）なのである。

ヴィオラは「悲劇の楽器」である。それはいつも悲しい役を演じているからである。

悲劇1：子どもが始めない唯一の楽器である ～ヴァイオリンやチェロには何分のいくつという分数楽器があって、子供のころ小さいものから始め、成長とともに大きくしていくのだ。だが、ヴィオラには子供用がない。なぜならヴィオラを小さくしたらヴァイオリンになってしまうから。（実際にはなりません。）ヴィオラ奏者の多くは子供のころヴァイオリンを習い、高校や大学で転向した（又は回された）人である。

悲劇2：中音域を出すには小さすぎる ～ヴィオラは他の楽器のように大きさが決まっていない。日本人は胴長が38cm～42cmのものを使用する。腕や指の長さによって自分に合った大きさを選ぶのだが、本来この音域を鳴らすには54cm（ヴァイオリンの1.5倍）くらい必要だという。大きくすれば当然、演奏が困難になるというジレンマがある。

悲劇3：ヴァイオリンと同じように構える ～ヴァイオリンと同じように顎に挟んで構えるから、ヴァイオリンと同じ括りで扱われることがある。だからテレビなどでは、ヴァイオリンが映ってもヴィオラはなかなか映してもらえないのだ。もし膝に載せてチェロのように立てて弾いていたら、ヴィオラの人生？は変わっていたかもしれない。

悲劇4：目立たない楽器である ～ヴィオラは元々目立たない楽器である。だから常に大きく弾いて存在感を示さないと誰も気付いてくれない。だが、ヴィオラが目立つことを嫌う指揮者も多い。少しでもアピールすると注意される。そういう指揮者にとってヴィオラは常に「味噌汁の出汁」でなければならないのだ。だからヴィオラ奏者は欲求不満になる。

悲劇5：メロディを弾かせてもらえない ～多くの作曲家にとってヴィオラは「伴奏楽器」である。だから「後打ち」や「伸ばし」が多く、メロディを弾くことが滅多にない。中音域のメロディはチェロやクラリネット、ホルン、コーラングレ（イングリッシュホルン）が担当するためだ。オーケストラからこれらの楽器がなくなれば、ヴィオラの人生は明るかったはずだ。

悲劇6：他の楽器とのユニゾンが多い ～たまにメロディが出てきても、多くの場合、他の楽器と音が重なっている。クラリネットとは相性がよいが、ホルンやトロンボーンと重なっているときは、諦めてじっと耐えるしかない。

悲劇7：音部記号が特殊である ～ヴィオラの音部記号はハ音記号（アルト記号）である。ト音記号もたまに使われるが、作曲家がヴィオラにおいしいところを書かないのは、この特殊な音部記号が一因かもしれない。ピアノ譜をそのまま写せないのが、面倒なのだろう。

ヴィオラの悲劇はまだまだ続く……。